



BOOK REVIEW

番外編

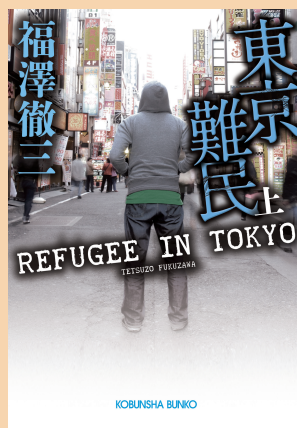
眠れぬ夜、
眠らない夜のため
に厳選した小説

ブックナビゲーター
協会職員：竹内 敦

REVIEW. 1

東京難民 (上)(下)

福澤 徹三 著



[光文社文庫、2013年7月、
上・下各679円]

本書は、2014年に映画化されたので、ご存知の方もいるだろう。

主人公、時枝修は、東京郊外にある私立大学の3年生。クラス担任から告げられたのは、学費未納で除籍になるという寝耳

に水の事実だった。実家では、借金を抱えた両親が失踪。主人公は、アルバイトを転々とする中、家賃滞納で住居も追い出されてしまう。普通に暮らしていた主人公の人生が、ホームレス（これを難民と称している）へと徐々に転落していく過程を見ると、小説としてのストーリー展開には全く無理がない。誰でもこのような展開になってしまうことがありうると思わせられる。

終盤で登場する謎の老人ババが、見事な役割を果たしている。彼の口から出てくる言葉の数々は、我々の人生に見事な示唆を与えている。例えば、ババ「おまえの人生は、おまえだけのものだ。他人の人生を生きることとはできない」、主人公「そのくらいわかってます。ただ、なんで自分はこうなんだろうって思うんです」、ババ「過去に執着するからだ。過去はひとを縛り、未来はひとを惑わす。おまえにはいまがあるだけなのに、なにを思わずらう」等々。

展開も早いので、娯楽小説として、あるいは現代社会の構図をいつもと違う視点で見られる小説としても面白い。

REVIEW. 2

書斎の鍵

喜多川 泰 著



[現代書林、2015年6月、
1,512円]

『賢者の書』や『また、必ず会おう』と誰もが言った』など、筆者は、自己啓発系小説の分野での第一人者。飛躍し過ぎず、無理のない日常の中で登場人物の心温まる気づきを通じて、読者にも気づいてもらうのが、喜多川氏の作風である。

紙でできた本も珍しくなった、時は2055年。主人公前田浩平は父親を亡くした。父の生前の回想において、父への反発、照れが原因で、父の人生のこと、その祖先のことについて、父子間で思いのほか、話ができていなかったことに気づく。父が亡くなり、親戚、友人から色々聞かされ、少しずつ父のことが分かりだす主人公。そのキーワードは、読書と書斎の鍵。

心を動かされた本1000冊で、書斎を満たそう。

REVIEW. 3

サイレント・ブレス

南 杏子 著



[幻冬舎、2016年9月、1,728円]

大学病院の勤務医から訪問診療クリニックの医師へと"左遷"された主人公水戸倫子と自宅での死に至るまでの6人の患者や家族とのやりとりである。著者は出版社勤務を経て、その後、医師となった方だ。現在（執筆当時）、終末期医療専門病院に勤務している。出版社での経験に加え、専門医としての経験がプラスされ、作家デビュー作としては完成領域に達していると思えるほど読み応えがある。

「サイレント・ブレス」というのは、静けさに満ちた日常の中で、穏やかな終末期を迎えることをイメージする言葉だそう。

どれだけ医療が進歩しても治る人、治らない人が出てくる。益々高齢者が増えていく日本で、自宅で安らかに亡くなりたいと望む人々に対応したものが、訪問診療クリニック（在宅医）である。ご自身や親族が最期の時をどう迎えるか、Terminal Life Planning と言えるのではないだろうか。